

ヘーベルハウス

2.5世帯ものがたり

完結篇
～最終話～

次の2.5世帯と 松本さん。

家は何世代住み継げるだろうか？

「懐かしいものを見つけちゃった」娘が差し出した一枚の写真。
 「若いな～みんな二十年前のだよ。五歳のワタシ、可愛いくない？」
 「確かに」パパも違うね「確かに」まだ毛がある「確かに」っておい！
 今日とは二〇四三年、三月十五日。僕、吉田孝則六十五歳は、会社も定年を迎え、いまは六十二歳の妻と、独身の長女、春香（三十五）と暮らしている。僕らが2.5世帯住宅を検討し始めたのがまるで昨年のお盆のことのようにだけど、あれから三十年が過ぎた。2.5世帯で同居してから色んなことがあった。でも、ひと言でいえば「幸せ」だった。共働きで平日はあまり時間のとれない子育て。父母姉に支えてもらい、二人の子は立派な成人に育ってくれた。両親の介護は外部サポートサービスをメインに、家族みんなで協力し合えた。特に、血のつながらない義理の親をとともに見てくれた妻には本当に感謝している。由紀子姉さんは四十歳の春、結婚して家を出た。たまたま帰ってきて愚痴を言ったりしてると、なんだかんだ家庭は幸せそうだな。そうそう。同じく独立して家を出た長男の翔太からこの前電話があった。二人目の子どもが生まれ、アパートも手狭になってきた。奥さんも同意してくれたから同居しないか？とのことだ。「：俺はいいけど、2.5世帯同居になるぞ」父さん、それは吉田家の伝統じゃないか」翔太、そう来たか。電話ごしに二人で笑った。「ピンポイント」チャイムが鳴る。今日は来客の予定なんてあったかな？「あなたヘーベルハウスの30年目点検で松本さんがいらしたのよ」と妻。ロングライフ住宅を提唱し、ずーっとこまめにアフターメンテナンスをしてくれる「ヘーベルハウスの60年点検。だから安心して住み続けられた。ありがたい。住み慣れたこの家を、その価値を。次の世代に受け継いでいく。家を建てた親としてこれほど誇らしいことはない。息子よ。住み継いでくれてありがとう。新しい2.5世帯で、お前たちの未来を築いていくんだぞ。」

※前シリーズはヘーベルハウスHPへ。
完結篇（終）

考えよう。答はある。

2.5世帯住宅で、暮らしませんか？

ヘーベルハウス